

保幼小接続の 「いま」を考える

—第3回幼児教育・保育についての基本調査—

ベネッセ教育総合研究所では、幼児教育・保育について保育現場の実情と課題を調査するため、全国の国公立・私立幼稚園、公営・私営認可保育所、公営・私営幼保連携型認定こども園の園長等を対象に2007年より約5年ごとに調査を実施しています。今回は3回目となる2018年の調査（以下、18年調査）の結果から、小学校との接続・連携について取り上げます。

保育者と教員、家庭の連携を深め 自己肯定感を高める学びを

國學院大學 人間開発学部 子ども支援学科 教授

塩谷 香先生

しおや・かおり

専門は保育学、保護者家庭支援。東京都品川区立保育園園長、東京成徳大学子ども学部子ども学科教授を経て現職。主な編著書に『幼稚園・保育所・認定こども園「要録」記入ハンドブック』（ぎょうせい）。



子どもが小学校生活を イメージできる交流を

新しい要領・指針、及び小学校学習指導要領には、これまで以上に幼児教育と小学校教育の円滑な接続の重要性が示されています。

今回の調査では、要領・指針に基づき、多くの園で、小学校との接続を意識した教育課程や全体的な計画の編成の見直しが行われていることがわかりました（P.16 **12**）。また、小学校と交流活動をしている比率は、園種を問わず第1回調査（2007/2008年。以下、07/08年調査）、第2回調査（2012年。以下、12年調査）と比較しても高まっており、交流が活発化しつつあることがうかがえます（P.18 **4**）。

ただ、保幼小接続には課題が多いこともわかりました（P.19 **6**）。よく聞かれるのが、特に都市部の小学校で、多くの園から入学者が集まるため、きめ細かい連携が難しいということです。小学校から見れば、公・私立の違い以外にも、小規模な園や認可外の園などのさまざまな園種があり、すべての特性を理解して、個々の園と連携するのが難しい実態があります。できれば園側から、近隣の小学校との連携を積極的に進めてほし

いところ です。

年長児にとって、未知の場所である小学校は、就学への不安を抱きやすい場所でもあります。子どもたちが実際に授業を見学したり、行事や交流活動に参加したりして、小学校の学習や生活がどのようなものなのかイメージできるようにすることで、不安の多くは解消していくはず です。

ですから、子どもが実際に就学する予定の小学校を見学することが、必ずしも重要だとは考えていません。園もその点にはこだわらず、まずは身近な小学校との交流ができるとういでしょう。小規模な園であれば、他の小規模な園と連携して、1つの小学校と交流するなどの方法もあります。

また、今回の調査で小学校との接続を積極的に行っていることが明らかになった国公立幼稚園や公営幼保連携型認定こども園が、自治体のサポートなどを得てモデル園となり、どのような保育や活動を行えばスムーズな就学につながるのかを研究し、他の園に周知していけるとよいのではないのでしょうか。小学校側の負担も考慮し、園同士の横の連携も強化していきながら、交流活動を考えていくとういでしょう。

■「第3回幼児教育・保育についての基本調査」の調査概要

調査テーマ： 園の環境・体制、教育・保育活動、子育て支援活動などに関する実態、園長の意識

調査対象： 園児数30人以上の国公立・私立幼稚園、公営・私営認可保育所、公営・私営幼保連携型認定こども園の園長等*

*園長・所長・施設長、副園長(教頭)・副所長・副施設長、主任等

調査方法： 郵送法(自記式質問紙を郵送により配布・回収)

調査時期： 2018年11～12月(2007/2008年、2012年にも実施)

調査地域： 日本国内全域

発送数： 16,037園 有効回答数：4,565園(有効回答率28.5%)

調査項目： 環境や設備/保育者の状況/教育・保育目標/要領・指針への対応/教育・保育活動/子育て支援/保育者研修/保幼小接続/園の運営上の課題/保護者とのコミュニケーションなど。

引用転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください。本調査の引用時の名称:ベネッセ教育総合研究所「第3回幼児教育・保育についての基本調査」(2019)

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。▶ <https://berd.benesse.jp/> または

ベネッセ教育総合研究所

検索

保幼小で積み重ねてきたことを共有し、 接続期の子どもの姿を知る努力を

保育者と小学校教員との連携にも課題があります。園の先生は小学生の育ちを、小学校の先生は幼児の育ちを理解する努力が必要だと考えています。

例えば、離乳食を食べ始めた0歳児の介助は、子どもが食事に気持ちを向けて自分から食べようと口を近づけてきたタイミングで、スプーンを口に入れるようにします。それは、ただ単に食べさせている、ということではありません。子どもの意欲がさらに高まるように、子どもの発達に合わせた働きかけが必要なのです。それが子どもの主体性を育むことにつながります。年齢ごとのそうした発達を知らずに接していると、主体性の萌芽を見逃してしまうことにもなりかねません。同様のことが接続期の子どもにもいえます。小学1年生の発達や学びを知らずに、接続期の年長児に、就学に備えて一定時間、椅子に座ってられるようにするなどの表面的な援助をするだけでは、学びの土台を十分に育てているとはいえません。

保育者と小学校教員が連携を強め、互いが積み重ねてきたことを共有し合い、小学1年生と年長児、さらには小学生と幼児全般の理解を深めてほしいと考えています。互いの保育・教育への理解を深めることで、保幼小の共通項も見えてくるはずですし、よりよい連携のしかたが見えてくると思います。

家庭の協力を得ながら 自己肯定感を高めてほしい

今後、保幼小接続の質を高めるために、私自身が重要だと感じているのは、子どもの自己肯定感をいかに高めるかということです。自己肯定感を高めるには、

子どもが自分の意見をきちんと主張し、やりたいことを表現して、認められたという意識をもてる必要があります。子どもの意欲や主体性がポイントになりますが、そうした主体的な学びをどう引き出していくかにも、園と小学校には、発達段階による違いがあるように思われます。園では遊びの中で個に応じて育むのに対して、小学校では集団の学びの中で育むことが中心になります。そうした互いの違いを把握するために、保幼小の先生方で研究会などを開催している自治体もあります。子どもの自己肯定感につながる主体的な学びについて、小学校の先生方と話し合い、ぜひ模索してほしいと思います。

そして、接続期の育ちをさらによいものにしていくためには、家庭の協力を得ることも大切だと考えます。家庭が乳幼児期の生活基盤となる衣食住を保障し、確かな愛着関係を築いて子どもの気持ちを支えることで、子どもは自信をつけ、さまざまなことに挑戦していくことができるからです。それは、小学校以降も同様です。現在、貧困問題や虐待問題など要支援家庭が増えている状況もあるため、園の先生方には、家庭があってこそ幼児教育が成り立つという意識をもったいただき、小学校への接続という観点からも、家庭との連携に力を注いでいただきたいと思います。

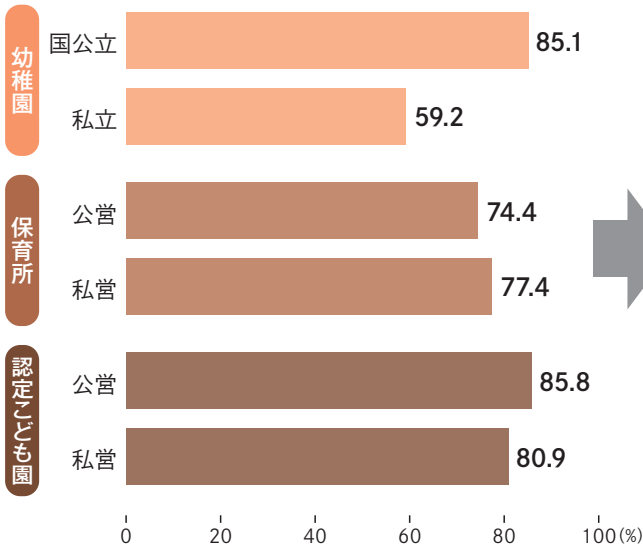
そして、小学生を含めた子ども理解をさらに深め、子どもの意欲や主体性を育み、小学校の学びへとつないでほしいと願っています。

次ページから、
詳しい調査結果を
ご紹介いたします



1 教育課程・全体的な計画の編成の見直しについて

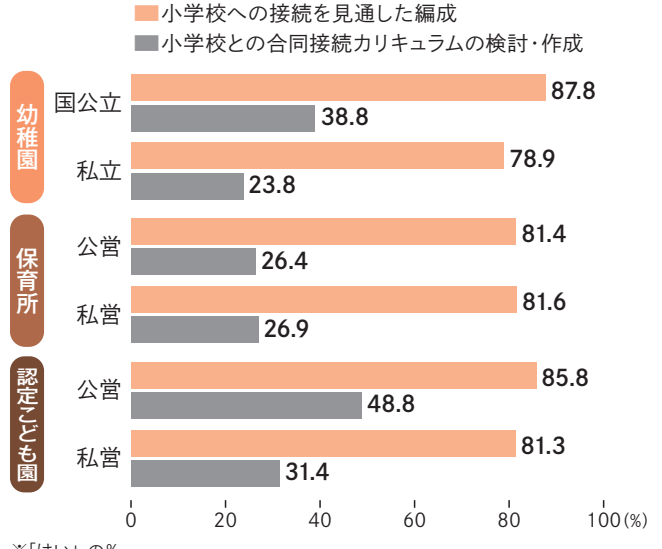
多くの園が新しい要領・指針を踏まえ、積極的に編成の見直しを行う



※「はい」の%。
※以下、1～6について、認定こども園は幼保連携型のみ。

2 小学校への接続を見通した編成や接続カリキュラムの有無

見直しをした園の8割前後が小学校への接続を見通した編成に



※「はい」の%。
※教育課程・全体的な計画の編成の見直しをした園のみの数値。

2018年に、新しい要領・指針が施行されたことを受け、「教育課程・全体的な計画について、編成の見直しを行っているか」を尋ねました(1)。国公立幼稚園と公営・私営ともに幼保連携型認定こども園では、見直しを行う園が8割を超えていました。保育所でも公営・私営ともに7割以上が見直しを行っています。一方、私立幼稚園は、6割弱と他園種よりも低めの結果でした。

また、編成の見直しを行った園に、「小学校への接続を見通した編成をしたか」を尋ねたところ、園種を問わず8割前後の園が、小学校への接続を見通した教育課程・全体的な計画の編成を行っていると回答しました(2)。小学校への接続は、園の種別にかかわらず、積極的に取り組んでいる様子がうかがえます。ただし、見直しにあたり、実際に「小学校と接続カリキュラムを合同で検討・作成したか」という問いへの肯定率は、2～3割とそれほど高くはありませんでした(2)。その中で、公営幼保連携型認

定こども園が最も高い5割近くの肯定率を示し、意欲的に取り組んでいることがわかりました。

塩谷先生
から

今回の調査は新しい要領・指針に基づき、各園で教育課程・全体的な計画の編成の見直しに積極的に取り組まれていることがうかがえます。私立幼稚園の数値が全体的に低めなのは、園独自の方針を大切にしているためではないでしょうか。また、国公立幼稚園と公営幼保連携型認定こども園の数値がより高いのは、公営機関なので公立小学校との連携がしやすいことに加え、幼保連携型認定こども園は比較的新しい形態であるため、新しいことに取り組みやすい面もあるからだと考えられます。

保幼小の交流の際にポイントになるのは、園児が小学校生活のイメージをもてるようにすることです。ハンカチを持って生活するといった表面上の内容を伝えるだけでなく、どのような環境で、どのような学習をするのか、園児が具体的にイメージできるような交流が行われることを期待したいですね。

データ解説・本調査の担当

ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室 主任研究員
持田聖子 もちだ・せいこ

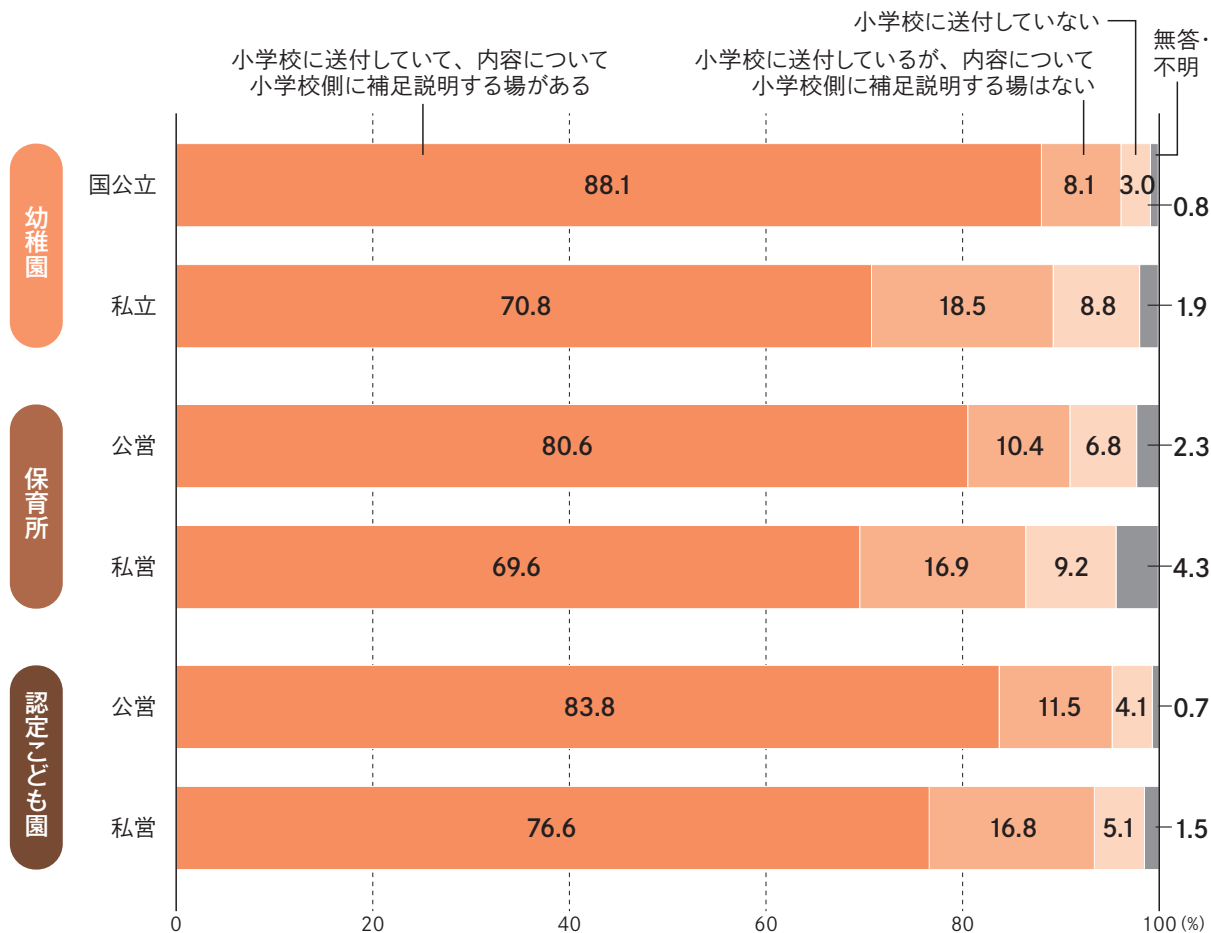
妊娠・出産期から乳幼児をもつ家族を対象とした調査・研究を担当。主な調査は、「妊娠出産子育て基本調査」(2006年～2011年)、「産前産後の生活とサポートについて調査」(2015年)「幼児期の家庭教育国際調査」(2016～2018年)など。2018年より「幼児教育・保育についての基本調査」に携わっている。



3

「要録」の写しの小学校への送付状況

要録の内容について小学校側に補足説明している園が多い



小 学校に「幼稚園幼児指導要録」「保育所児童保育要録」「幼保連携型認定こども園園児指導要録」（以下、要録）の写しを送付する際に、内容について小学校側に補足説明をしている園が7～9割近くと、高い比率であることがわかりました（3）。全体的に国公立や公営の方が比率が高いのは、公立が多い小学校との連携を取りやすいことが関係していると思われます。

本調査では、要録に関する課題や運用にあたって配慮していることなどを記入する自由回答欄を設けましたが、その内容を見ると、「地域に情報交換の制度があり、複雑な家族関係であることなどは直接会って伝えている」「要録記入後に小学校の先生に、園児の様子や家庭状況を話す機会を設けている」といった声が上がっていました（その他の自由回答はP.20～21参照）。

要録の送付で子ども一人ひとりの姿や発達の状況を知らせることに加え、多くの園で、要録に書き込みづらい家庭

状況などの補足情報を小学校と共有していることがわかりました。

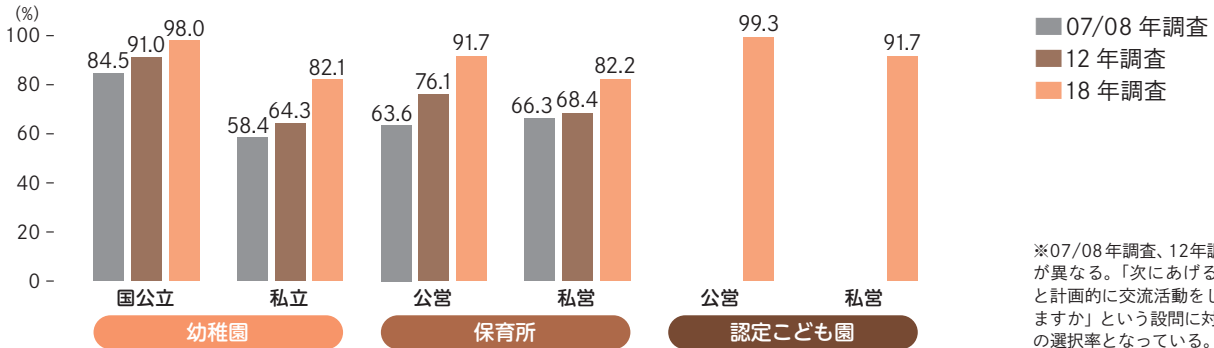
塩谷先生から

園の先生方から「要録を丁寧に書いても、小学校の先生に読んでもらえないのではないか」という声を聞くことがあります。確かにどのように活用されているのかは、学校や先生によってさまざまだと思います。ただ要録は、園や保育者にとって、保育を振り返るためのよい資料となります。例えば、要録には就学直前の子どもの姿が書かれています。担任保育者が書くことにはなりますが、園全体で内容を共有し、園のめざす子ども像を改めて確認することで、保育の改善につなげることができます。また、要録を作成する際には小学校との接続を踏まえ、「10の姿」を意識して記入してみてください。「10の姿」は子どもの育ちの指標であり、小学校と共有していくべきものです。その子どものよさや伸びていってほしいところなどを、「10の姿」を通して伝えていけるよう工夫していただきたいと思います。

4

小学校との交流活動の有無

地域の小学校との交流は園種を問わず8割以上で実施



※07/08年調査、12年調査では聞き方が異なる。「次にあげる園外の人たちと計画的に交流活動をしたことがありますか」という設問に対する「小学生」の選択率となっている。

5

小学校との交流活動の内容

国公立幼稚園や公営認定こども園は多様な交流を積極的に実施

	幼稚園		保育所		認定こども園	
	国公立 (594)	私立 (729)	公営 (770)	私営 (1,218)	公営 (147)	私営 (552)
園児が小学校の見学や授業参観をする	81.5	67.4	60.4	64.1	75.5	70.5
園児が小学生と一緒に活動をする	87.2	62.8	69.2	61.4	86.4	66.8
園児が運動会や発表会など、小学校の行事を見学する	52.0	21.9	35.6	38.8	51.7	37.7
園児が運動会や発表会など、小学校の行事に参加する	37.9	20.0	35.1	27.4	44.2	29.3
園児が小学校の給食の体験をする	47.8	10.2	13.0	12.6	26.5	10.5
園児が小学校の校長や教員の話聞く	43.1	16.9	20.5	19.3	35.4	21.4
小学校の教員が園児に保育を行う	10.8	5.1	15.5	10.0	13.6	7.4
小学生が園の行事を見学したり、参加したりする	41.6	26.1	29.7	33.8	43.5	34.4
その他	4.7	5.8	9.4	7.6	7.5	6.2

※複数回答。 ※小学校との交流活動がある園のみの数値。()内は各園種の数。

地 域の小学校との交流活動の有無を尋ねたところ (4)、18年調査では、全体的に8~9割以上と盛んに行われていることがわかります。

また、聞き方は異なりますが、07/08年調査、12年調査の同項目の結果と比較しても幼稚園・保育所ともに比率は高まっており、より交流活動が活発化していることがうかがえます。特に私立幼稚園では、07/08年調査の58.4%から18年調査の82.1%へと20ポイント以上、数値が高くなりました。

交流活動の内容を見てみると (5)、「園児が小学校の見学や授業参観をする」「園児が小学生と一緒に活動をする」が園種を問わず多いようです。また、園児が小学校に行くだけでなく、「小学生が園の行事を見学したり、参加したりする」という交流も実施されていることがわかりました。子ども同士の交流は、全体的に定着しつつあるといえそうです。

塩谷先生
から

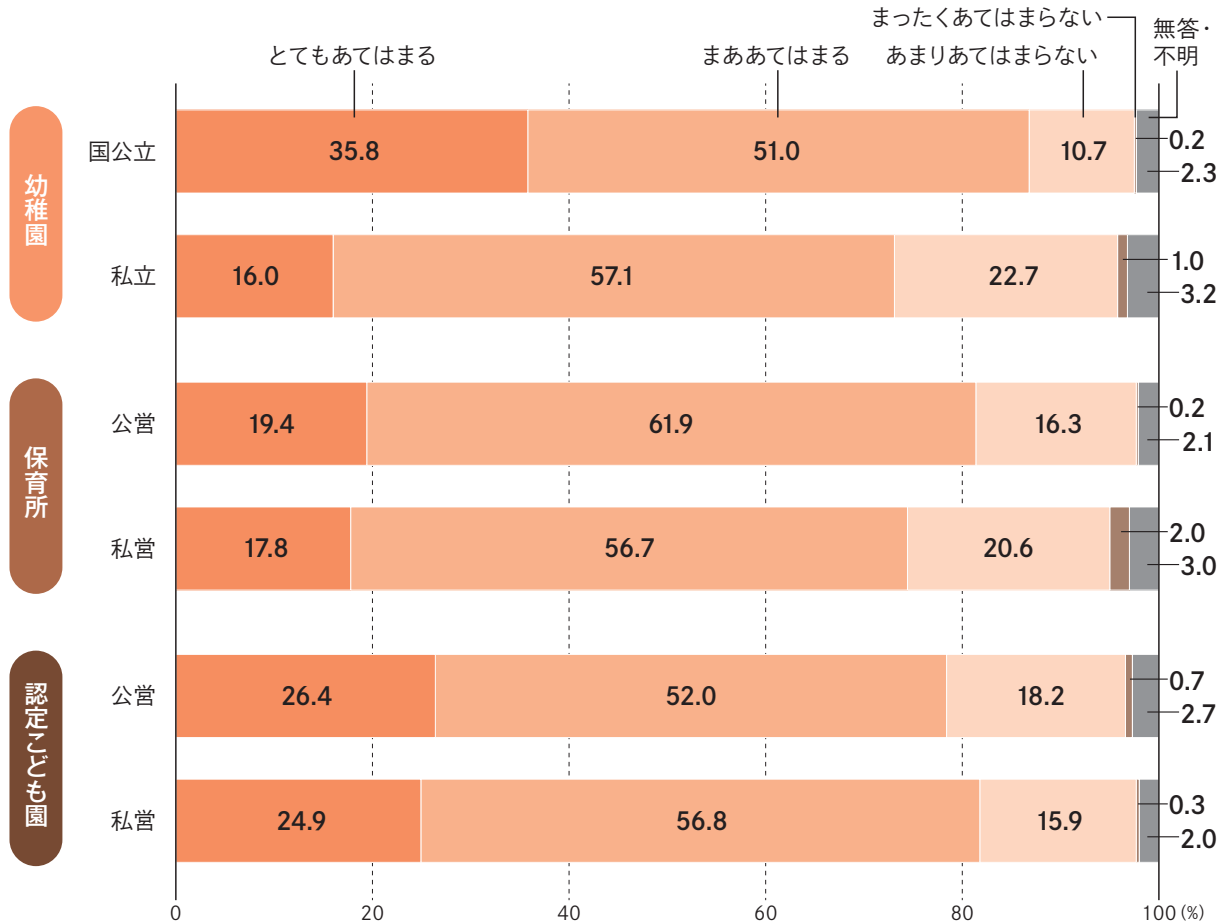
園児と小学生との交流で大切なのは、「互恵性」だと思います。互いにメリットがあるような交流にすることが、活動を充実させるポイントです。例えば、小学生が地域の乳幼児と触れ合う機会が減っているため、小学生にどのように園児と遊んだらよいかを計画させ、一緒に遊ぶという取り組みを実施している自治体もあります。小学校側の希望も聞き、交流活動を組み立てると、より意義の高いものになるのではないのでしょうか。

また、今後期待したいのは保育者と小学校教員との連携です。幼児期に主体的な学びの土台を築くためには、どんな視点が必要なのかを考えるために、小学校の先生方との研究会などを開催している自治体もあります。互いが歩みより、スムーズな就学のために何ができるのか、より具体的なカリキュラムを設定することが今後の課題になると考えます。

6

小学校との連携を園の課題と感じているか

連携に関する課題を感じている園が多い



保 育実践上、運営上の課題について尋ねたところ、園種を問わず7割以上の園が小学校との連携について課題を感じていることがわかりました(6)。特に国公立幼稚園は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した数値が86.8%と他園より高い比率を示していました。

今回の調査から、新しい要領・指針を踏まえて、教育課程・全体的な計画の編成の見直しを図ったり、子ども同士の交流を行ったりする園が多いことがわかりましたが、課題を抱える園も多いことがわかりました。

本調査の自由回答欄を見てみると「アプローチカリキュラムを小学校に提出しただけになっている。小学校側のスタートカリキュラムとのすり合わせをする検討会をもちたいが、日程の調整が難しい」「小学校との距離を近づけたいと思っているが、小学校側にとっては対象園が多すぎるため、思うように進まない現実がある」などの声が上げられています(P.20～21)。これらの現実的な課題に対して

は、互いの年間計画を立てる時期に合わせて日程を相談する、近隣の複数の園が横の連携を図って小学校にアプローチする、などの工夫が考えられます。

塩谷先生
から

歴史ある私立の園では、長年にわたって独自のカリキュラムを実施しているため、小学校との連携が難しいと感じている場合も多いようです。しかし、独自のカリキュラムに重きを置いているとしても、幼児教育において最も大切な点は自発的な遊びを通した主体的な学びであることを理解していれば、めざすところは同じはずです。表現は違うかもしれませんが、新しい要領・指針と園のカリキュラムは、つながっているのです。

来年度から全面実施となる小学校の学習指導要領に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)は、これからの園と小学校が子どもの成長を共有できる手がかりとなります。それをもとに要録を書いたり、交流活動を活性化させたりして、園での子どもの育ちを小学校に伝えていきましょう。

保幼小接続への声をご紹介します FREE ANSWERS

保幼小接続について、園でどのような思いや課題をもっているのか、園の現場の声をご紹介します。

※寄せられた自由回答を、文意を損なわない範囲で編集し、掲載しています。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)について

●「10の姿」によって、幼児教育がどのようなものなのかがわかりやすくなったことはよかったと思いますが、小学校の先生が「10の姿」を「できている、できていない」と捉えてしまったら、それは意味が違ってしまいます。小学校の先生に「10の姿」の意味を理解してもらえるようにしていくことが必要だと考えています。

●幼稚園では、「遊び」を通しての教育が方向目標を掲げて行われています。一方、小学校では、教科等の学習が到達目標を掲げて行われています。保幼小の接続の重要性が強調される中、**両者をいかにして接続していくかを模索しているのが現状です。**

●「10の姿」は、小学校との連携の際に、共通理解を図るための観点として有用ですが、半面、**達成目標ではないことをしっかりと伝えるように常に肝に銘じています。**

●「10の姿」については、それに向かった保育をするためのものではなく、**育ちを分析する際の目安である**と捉え、今まで大切にしてきた保育でよいということを確認しながら



ら、振り返りを行っています。小学校との連携を図る際にも、「10の姿」について説明していきたいと考えています。

●小学校の先生に、園の目標や「10の姿」について説明を求められたとき、**保育者が説明できることが、園と小学校の接続で大切になると**思います。

●園のめざす子ども像に取り組めば、「10の姿」は自然についてくると考えています。園の遊びがどのように小学校の教科や学びにつながるのかが、わかるようになるとよいと思います。

「要録」について

●クラス編成の時期に小学校の先生が訪ねてきますが、要録を見ているとは思えない質問もあります。園では苦労して要録を書いているのですから、**校長先生から確実に担任の先生に回すようにしていただきたいです。**

●要録は、園にとっては作成に手間がかかる割に、小学校の現場では生かされていないと感じています。そのため、本園では内容簡略化を検討し、要領・指針の改訂に伴って、手書きではなくシステムの使用も考えています。また、**保護者から個人情報開示を求められたときのことを考えると、要録にはなかなか本音で書けないもどかしさ**も感じています。



●要録作成の際には、5領域を窓口にして、子ども一人ひとりの個性と発達を見極め、**その子に応じた援助や環境づくりをどのように進めてきたか、丁寧に記載**することを心

がけています。

●要録を作成する際には、「10の姿」に照らし合わせて、**結果だけではなく過程のエピソードなども交えながら**、保育者一人ひとりの視点を大切に記載しています。

●要録を作成する際に「10の姿」をどう入れ込んでいくか、各担任にこれまでの学びを生かして書いてもらいたいと思いますし、さらに**園長・副園長が助言**することで、小学校の先生に子どもの育ちが伝わりやすいものにしたいです。

「アプローチカリキュラム」について

●要領を踏まえて、教育課程の見直しを図ったり、アプローチカリキュラムを作成したりしていますが、まだ、アプローチカリキュラムを小学校に提出しただけの状態です。**小学校側のスタートカリキュラムとのすり合わせ等の検討会をもちたい**とは思っているのですが、なかなか日程の調整がとれずにいるところです。

●年長クラスの担任になると、**保護者から文字や計算、楽器などについて小学校入学に向けた指導を求められる**こともあります。要領の趣旨に沿った保育実践がぶれないよう

に気をつけなければと思います。

●本県では、保幼小接続カリキュラムとして、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの作成ポイントが示されています。それに基づいて自園のものをつくろうとしたところ、保育の構成・要素の違いなどから、かえって混乱する状態となりました。そこで、自園で培ってきた保育を軸に、カリキュラムの再構成を試みています。**若い保育者も交えた園全体で取り組むことで、保育のねらいと活動の関係性を深く考える作業**になっています。

「小学校との連携」について

●小学校との接続カリキュラムについて作成・研修を進めています。ただ、園と小学校が一堂に会した研修の実施は難しいので、**園で話し合った内容を教育委員会を通して小学校や他の園と共有し、市全体で作成を進めています。**

●園側は小学校との距離を近づけたいと思っていますが、小学校側にとっては幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園などと**対象園が多すぎるため、接続が思うように進まない現実**があります。

●幼稚園での活動の中で小学生が参加できるものがあれば、小学校に声をかけています。**園児と小学生の触れ合いが連携のきっかけとなるように配慮**しています。

●自治体には、小学校との情報交換制度があり、家庭の状況など**要録に記載できないような内容は直接会って伝える**ようにしています。

●小学校と園との子どもの発達に関する捉え方のギャップを埋めるために、要録記入後、**小学校の先生に、園児の様子や家庭状況などを直接伝える機会**をつくるようにしています。

●要録も大切ですが、小学校の先生と直接話をし、**保育の様子を見学してもらった方が、園での教育に対する理解を深め、小学校への移行がスムーズ**になっていると思います。

●「10の姿」を軸として、**小学校と共有できるような研修**に取り組んでいます。

